

救いを達成するための三要件

(ピリピン・二二一七八)

猫背気味、色白で暗い顔をした重量超過の男の隣には程良く焼け、割れた腹筋を見せつけ、真っ白な歯を出してほほ笑む男。良く見れば同じ顔だ。これは「結果にコミットする」で有名な某プライベート・ジムの広告であるが、日本におけるプライベート・トレーナーの先駆者といえればやはりケビン山崎氏に止めを刺す。清原選手や中田翔選手といった多くのアスリートや芸能人が彼のジムに通っているのだが、その名前はトータル・ワーク・アウトという。「訓練する、運動する、苦心して成就する」という意味だ。「言い得て妙」とはこの事である。

時に一二節の「自分の救いの達成に努めなさい」は英語では work out your salvation となる。以下救いの達成の三要件―その前提、態度、そして行動について考えたい。

一、前提―神の力

「自分の救いの達成に努めなさい」ということばを見ると正直「えっ」と思う

方もいると思う。また「それではキリスト教は自力救済を唱える宗教なのか？」と考えてしまいやすいのだが、パウロがそういう意味でこれを語っていないことは一三節に明らかだ。というのもそこには私たちの内に働いて救いを完成させて下さるの神であることが明確にされているからである。臨終の床でイエスを受け入れ、その後すぐに天に召されるといふケースは例外であろうが、殆どの場合キリストにあつて新しく生まれたものは、新しく生まれたる者として生き続けねばならない。つまり救いの道を歩まねばならない。しかしその際に何よりも大切な事はこの救いの業が終始主ご自身の働きによるものであることを心に刻み込むことである。そうでなければ、私たちはすぐに尊大になつたり、はたまた妙な自己卑下に捕われてしまうからである。

二、態度―主への畏れ

救いは確かに私たちの行動によつて達成されるべきものではあるが、その背後には終始神のみ手があるということをおのずちが知るならば、私たちの態度はおのずとへり下つたものになる。だがもし救いの達成の為の努力の背後にある神の恵みの力の存在を忘れるなら、人間はとたんに傲岸不遜な人間になり下がる。「パリサイ

人と取税人(ルカ一八・九以下)」を思い出してみよう。神の目に受けいられたのは神を畏れ、憐れみを乞ひ続けた取税人であつて、自分の行為を誇りとしていたパリサイ人ではなかつた。だが気をつけねばならないのは、パリサイ人の行為そのものが否定されていたのではないということである。問題は寧ろ彼の不遜な態度にある。だから救いの達成に努める際、私たちはいつも主を恐れ、おのきつつそれを成し、ほめられた時には主に栄光を返していくという謙遜な態度が求められるのだ。

三、行動―疑わず、咳かずに行う

一四節に出てくる命令は、一五節に書かれる内容が結果が救いの完成と深くかわつているものであることから、救いの達成のための具体的な行動の指針であると考えられる。「救いの達成」などというと私たちはとかく密教の「護摩行」やら「回峰行」などの「常ならぬ求道」を想起しやすいものであるが、パウロの求める所は「疑わず、咳かずに行うべし」と至つてシンプルだ。とはいえよく考えればこれはこれで大変だ。なぜならその前に「全てのことを」と書かれているからである。確かに人間はある事について「疑わず」「咳かず」に行ふことは出来る。しかし、「全てのことについて」そうすることは人間業

ではない。しかし諦める必要は全くない。私たちは神業をもっているのだから。心の中に沈殿した不平安を聖霊による神の愛によつて押し流していただくよう、祈り求めるなら、人は苦境をも喜びにかえることが出来る。そしてその時に彼／彼女の救いは確かに成就へと進んでいくのである。

* * *

齢五〇の時に拝命した辞令。そこには「薬専事業部長」の文字が躍っていた。営業の最前線への転任だ。経理や人事、更には教育畑を歩いてきた彼にとつては青天の霹靂であつた。なお悪い事に部下たちも「部長、まずはお手並み拝見いたします」という態度であつたという。しかしクリスチャンであつた彼はつづやくことを良しとせず、祈りつつ働いた。程なく彼は大勝負に出る。漢方薬の販路拡大を目論み、何と五倍の売り上げという目標を掲げたのだ。現場は当然猛反対だが彼の信念は揺らぐことはなかつた。そして一年半後、彼は見事に目標を達成し、遂にはその会社の会長にまでなつた。ご存じ元カネボウ薬品会長の三谷康人氏である。友よ。神の救いの力を信じ、畏れ、全ての事を疑わず、咳かずに行うとき、救いへの道は開ける。さあ救いの達成を目指し、共に進もうではないか。